

●トランプ暴走の根源



トランプを理解するための「4つのキーワード」(写真提供/Getty Images)

テンアメリカ的」になってきた。それにつれて、かれらの政治も「ラ米的」になってきている、と。

さらに、氏はラ米的なものとして、著しい不平等、脆弱な統治機構、杜撰な経済運営、ポピュリズムへの傾斜、政治の不安定性などを示

米国を破壊する トランプの「ラ米化」

上野景文
文明論考家



米国最大のマイノリティー

トランプ2・0になってから、米国の混迷が続いている。米国は「本来の人格」から「別人」になりつつあるようだ。では、どんな「別人」になるうとしているのか？

本稿は、現下の米国では①「ラテンアメリカ化」②「第三世界化」③「十九世紀化」④「親ロシア化」の四つの「別人化」が進行中との理解の下、それ

らをキーワードに、トランプ下の米国混迷の本質に迫るものである。

トランプ氏は、この四つの「別人格」(ペルソナ)に取りつかれた天才であることを見極めないと、彼の「革命」の本質は見抜けない。

①米国の「ラテンアメリカ化」(以下、ラ米化)

米国の多くの都市は、ラ米からの移民に満ち、スペイン語を耳にすることが少なくない。ラティーノ人口

唆する。

ペルソナリスモの肥大化

「ラ米化」の極めつきは、トランプ政治に見られる「異常なまでの『個人色』」だ。ラテンアメリカでは、政治・統治面に「個人色」が入り込むことを容認する政治風土がある。

「ペルソナリスモ」(personalismo)と呼ばれるこの風土は、ラテンアメリカでは珍種ではない。大まかに言っても、政府機構が弱いラ米では、政治はペルソナリスモ色が強いものになりがちだ。適当な訳語がないので、本稿ではスペイン語のまま表記する。

他方、日本、西欧、(本来の)米国などの先進地域は、基本的には政府機構がしっかりしており、政府は制度上のルールに従って統治するものとされている。

大統領や首相といえど、個人的嗜

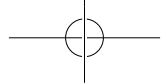
は黒人を凌駕し、米国最大のマイノリティーとなった。ラ米的なものは今日の米国社会に浸透し、日常の一部をなす。そのような背景もあってか、近時、「米国は『ラ米化』しつつある」との見方が聞かれる。

たとえば、フアイナンシャル・タイムズ(FT)のM・ウルフ氏はこう断じる。過去四十年の間に米国や欧州のいくつかの国では貧富の格差が大幅に拡大、所得分配状況が「ラ

好、情念、思い付き、恣意等によって国政を著しくバイアスさせるべきではないという考えだ。この制度主義が強いため、ペルソナリズムは抑制されている(「制度主義」：institutionalism)。制度主義が強い事例とえば、日本をおいてない。日本では、制度主義が強すぎる(よって、ペルソナリスモが抑えられ、政治判断はしばしば柔軟性を欠いたものとなる)と見られている。

その対極にあるのが(一部)ラ米諸国だ。ペルソナリスモが強く、制度主義は抑え込まれている。トランプ2・0下の米国もこの範疇だ。この両極の中間に西欧、韓国などがある。制度主義が基本であるが、ペルソナリスモも略々許容されている。(本来の)米国も同様だ。

ここで重要な点は、米国の変貌ぶりだ。米国では本来は制度主義が根



●トランプ暴走の根源

付いていたが、トランプ2・0になって、ペルソナリスモの肥大化と制度主義の後退が激しく進み、米国の「ラ米化」が起きたということだ。
いま米国では、多岐にわたり混乱、混乱、弊害が目立つようになっている。

羅列してみよう。

- ・「トランプ・ファースト・イズム」の突出（「国益」より個人の「利益」を優先）
- ・大統領が「全て」を「掌握」したがる（強烈な主人公意識）
- ・大統領令の乱発（制度の認識不足）
- ・大統領誕生日に合わせての軍事パレード（二五年六月十四日、ワシントン）
- ・各閣僚による異常なまでのトランプ礼賛
- ・プーチン氏への異常な計らいとネ

国はもとより、日本を含む西側諸国の国益が毀損され、国際秩序が不安定化しつつある。

なお中国でも、日本同様、制度主義が強い。強力な共産党官僚が統治しているので、政治・政策は安定的（まあ硬直的）である。政治・政策が不安定な米国と対照をなす。

中国とトランプ氏の米国の綱引きは、制度主義（中国）とペルソナリスモ（米国）の綱引きと言っている。プロ集団を動員できる中国は、制度主義が後退し、プロ集団を活用できなくなっている米国より、基本的に有利な立場にある。

かかる事態の改善・転換を見られるのは、トランプ退任後となるのか。退任後には、本当に事態の好転はあり得るのか。

私は、このトランプ氏の過激なスタイルは、同氏退任後、氏とともに

タニヤフ氏への過剰な甘やかし
・習近平氏、金正恩氏へのラブコール

・ボルソナレー前大統領（ブラジル）への異様な思い入れ（対ブラジル異常関税）
・弱者へのえげつない口撃（異常なまでの攻撃性）ゼレンスキー氏いじめほか
・民主党が強い州への嫌がらせ（軍派遣など）

- ・強烈な「被害者メンタリティー」
- ・国政とファミリービジネスの「融合」（利益への執着）、国政の私物化
- ・法令の軽視ないし恣意的運用（含、国際法）
- ・解けないCIA幹部人事介入
- ・軍高官人事への恣意的介入
- ・統計局長の解雇
- ・民間企業への営業、人事への介入

薄まると見る。なぜなら、このペルソナリスモは同氏に特有な気質に由来するものであり、多くの米国人にシェアされているものではないからだ。その意味で、ワシントンの政治風土の「ラ米化」は、表層の変化に過ぎないのかもしれない。

巷間では、トランプ退任後もトランプ的政治が続くと見る人が多い。戦略、政策といったサブスタンスについてはそうだろう。が、こと仕事のスタイルに関しては、前述のように、ラ米的なペルソナリスモは後退し、制度主義が復活するだろう。

ただ、米国の機構・制度はずたずたに切り裂かれてしまったことから、それらの復旧、国力の回復には難儀する可能性が高い。

最後に、トランプ氏の天才的能力がはらむ危険性について、ひと言。彼のような天才は、「モノを創造す

・自己抑制のきかない言動（思慮不足、短慮）
・コロコロ変わる発言、政策

・虚偽発言の連続（ポスト・トゥルース）
・多くの政府機関（含、援助機関）の廃止、ないし弱体化
・プロフェッショナルな人材の解雇、ないし、不活用（CIA、軍、国務省などの幹部の過激人事）

制度主義との綱引き

このように見ると、トランプ氏は米國政治にラ米的ペルソナリスモを過激に注入するとともに、制度主義をグチャグチャに壊しつつあることがわかる。

トランプ氏はラ米人ではないが、「ラ米人」の魂が乗り移ったが如くに振る舞っており、それらを通じ、米

「時だけでなく、「モノを破壊する」という面でも強烈なパワーを発揮する。が、天才は往々、自分の破壊力への自覚がない。何人もストッパーをかけられないまま破壊行為が続いていることに、米国民はそろそろ気づくべきであろう。

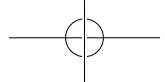
違和感しかない犠牲者面

②米国の「第三世界化」

加えて、米国は「新興国化」しているとの見方が広がっている。ファイナンシャル・タイムズのラナ・フォールハー氏はこう指摘する（二五年七月十一日付FT）。

「世界各国の政治的リスクを比較すると、米国のリスクは格段に高く、いまや、トルコ、コロンビア、メキシコ、イスラエル並みとなっている」

さらに、米国では政治家の権威主義的振る舞いが目に付くようになって



●トランプ暴走の根源

ており、「新興国」並みに権威主義が強まっている。

「新興国」、否、「第三世界」的な言辞を拡散しているという面では、これが、これまたトランプ氏だ。

どういふことか。まずは、「米国は被害者だ」と声高に叫ぶトランプ氏の声を聞いてみよう。同氏はこう主張する。

「米国は数十年にわたり、多くの国からの輸出によって犠牲を強いられた。特に、ラストベルトの産業は中国、ベトナム等からの輸出攻勢の犠牲になった。だから、トランプ関税は正当だ」

この「自分たちは犠牲者だ」という主張は、植民地主義に虐げられた第三世界に加え、反欧米感情を持つブーチン氏や習近平氏が多年にわたり合唱してきた。これらの国々が「犠牲者面」することは、一応理解できる。

係を強調しても馬の耳に念仏だろう。赤沢大臣の苦勞が偲ばれる。

以上が、米国の「第三世界化」のあらましだ。世界最強の経済パワー、覇権国である米国、しかも、ドル基軸制に伴う特権の上にあぐらをかいてうまみを吸い尽くしている米国が、「中小国の犠牲になっている」という見立てほど馬鹿馬鹿しいものはない。

特に、「裏庭」にあたるラテンアメリカやカナダをいじめ抜いているトランプ氏が、「自分たちは犠牲者だ」と言い張っている姿は滑稽千万だ。弱者・犠牲者のふりをして、諸外国からむしり取ろうという算段なのだろう。

③米国の「十九世紀化」

さらに、トランプ氏が「十九世紀的メンタリティー」を政治の場に注入していることにも注目したい。

が、世界最強の米国が「犠牲者面」することには違和感がある。

トランプ氏が第三世界と瓜二つの「犠牲者面」を見せる時、私には、これらの魂がトランプ氏に乗り移ってしまったている（「憑依」）ように見える。トランプ氏は第三世界の魂を「借用」し、かれら顔負けの強烈なレトリックを仕立て、「怒り」を爆発させて見せた。この演技が、大統領選挙で役に立ったことは言うまでもない。

お門違いの主張

かくして、米国政治は「第三世界化」し、関税、関税と叫んでいる。トランプ氏は大した「役者」だ。

とは言え、米国は日本、中国、ベトナムなどの犠牲になっているとのトランプ氏の議論は、フェイクそのものだ。「覇権国」米国はIT産業に重心を大幅にシフトし、巨万の富を

築いた。米国は、ITで稼いだ巨万の資金の一部を斜陽地域（の活性化）に振り向けるべきであった。

だが、当局はGAF Aからの徴税には消極的だった。製造業、斜陽地域を放置したのは米国政府に他ならない。日本やベトナムがけしからんというのは、お門違いだ。

トランプ氏は、斜陽化や赤字は全て外国のせいだと本気で信じているようだ。同氏は生来、「被害者意識」が強い人なので、それゆえ自然体で「犠牲者面」ができるのだろう。海外の「悪玉」に仕返しせねばと言い張り、もって票を稼ぎ、大統領に返り咲いた。

氏は、しばしば「日本はけしからん」と叫ぶ。日本をやり玉に挙げるのは、氏が「第三世界」的魂にとりつかれている時であり、そのような魂が氏を支配しており、氏が熱している瞬間は、彼に正論をぶつけ、同盟関

特に、彼が尊敬している第二十五

代大統領W・マッキンリー（在位一八九七―一九〇一）の業績、すなわち、マッキンリーの保護主義を基盤とする高関税政策、並びに帝国主義的領土拡張政策（フィリピン、ハワイ併合、グアム、プエルトリコ割譲などの成果）は、トランプ氏にとって格好の手本（ロールモデル）となっていると言われている。

その次のセオドア・ルーズベルト大統領は、パナマ運河を米国の支配下に治めるための布石を打った。米国の裏庭にあたるラテンアメリカを外部勢力から遮断し、力で支配する棍棒外交は、マッキンリー大統領の拡張主義の延長であった。

トランプ外交がこうした十九世紀の米国帝国主義の精神にとりつかれていることは、パナマ、ベネズエラ、

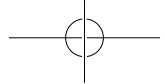
メキシコ、カナダ、グリーンランドなどへのトランプ氏の強面の姿勢から明らかだ。

氏の高関税策、弱者いじめも、十九世紀の遺産だ。「ガキ大将」的魂が米国に蘇ってきたと見る。アラスカの名峰デナリの名称をマッキンリーの復したことも、トランプ的復古主義の一端だ。

このほかにも、トランプ政治には時計の針を大々的に巻き戻している事例、一九〇〇年代、一九三〇年代を想起させるようなアナクロ的施策が多い。誤解を恐れずに言えば、トランプ氏は現代に飛び込んできた「十九世紀の人」なのだ。

ロシアより西欧がお嫌い？

④「親ロシア化」する米国保守派（背景に、伝統保守派vs.W O K Eの文化戦争）



●トランプ暴走の根源

八月のアラスカ・サミットでは、トランプ氏のプーチン氏に対する異様なまでの気遣いを見せつけられた。一部には、トランプ氏はプーチン氏に弱みを握られている（ために、ロシアに弱い）との見方すらあるが、真相は藪の中だ。

ただ、トランプ氏はロシアには親近感を持つ一方で、米国に「お説教」する西欧のことはあまり好きではないように見受けられる。

この際、両国関係の底流にあるものだけはしかと確認しておくのが良い。米国とロシアの保守派は、文明・文化論の次元では略々波長が合っており、親和性が高いという点が大事だ。

キリスト教伝統主義をベースとする両国保守派の世界観は、いまなお十八・十九世紀的なものを多分に宿

近を示す事例は、他にも少なくない。

たとえば、トランプ氏の元首席戦略官を務めたステイブ・パノン氏は、プーチン氏が傾倒する超保守の思想家アレクサンドル・ドゥーギン氏と、ローマで長時間、懇ろに話し込んだことが知られている。

最近、米国の保守のなかには、ロシアの保守派に共鳴して、国家と教会の一体化を提唱する向きすらある（統合主義）。

ヴァンス副大統領も、こうした保守派の思想に親近感を有しており、中世神学を熱心に学んでいるそうだ。

混乱の収束を図るのは……

という次第で、米国とロシアの保守派は最近、文化的、思想的な親近感を増している。だからといって、トランプ政権の対露姿勢に直ちに影

す。両者の「文明時計」の針は、百二百年前で止まっているようだ。

ロシアに通曉し、ヴァンス副大統領に影響を与えていると言われているシカゴ大学のミア・シャイマー教授の発言が示唆的だ。

「自分は十九世紀の人間なので、十九世紀的なモスクワにいると気分が落ち着く」

さらに過激に言えば、文明文化論的観点からということになるが、既述のように、トランプ氏は十九世紀から、プーチン氏は十八世紀からそれぞれ現代に飛び込んできた「過去の人」であり、その意味で、二人の波長が合ったとしても何ら不思議はない

ロシアと米国の超保守派を接近させたものは、西欧と米国の双方に根強いリベラル勢力にはかならない。

ロシア正教会はかねてより、W O

響するとまで言うつもりはないが、両国保守派の接近がさらに進むようだと、米露関係を「変質」させる怖れなしとしない。米露関係の背景として、視野に入れておく必要がある。

なお、米国とロシアの保守派の間に文明的親和性があるのとは裏腹に、米国と中国の間にはそのようなものは存在しない。

無神論の強い中国は、ロシアの保守派にとっても、米国の保守派にとっても、文明論の次元に限ってのことであるが、「異質」な存在だ。

いまの米国の混乱は、天才トランプ氏が米国に四つの「別人化」を仕掛けたことに由来する部分が大いことがわかりただけだと思う。

トランプ氏が持ち込んだ「台風」は、フランス革命時のジャコバン派と同じくらい強烈な混乱と破壊をもたらしている。

KE（「社会的な問題に目覚めている、意識が高い」という意味を持つ言葉）的なものに満ちた西欧に反発している。

米国の保守派も、NY、シカゴ、カリフォルニアなどに根強いW O K Eを目の敵にする。軍事・外交は別として、少なくとも文明文化論の次元では、両者は「同志」なのだ。

本年二月にミュンヘンで開かれた安全保障会議に参加したヴァンス副大統領は、こう言い放った。

「自分が欧州に関し懸念している脅威は、ロシアからでも中国からでもなく、欧州内部に存在する」

要は、米国の伝統保守派にとって、ロシアは「お友達」、（W O K Eに満ちた）西欧は「忌むべき存在」だというどぎつい発言であった。

米国保守派とロシアの保守派の接

文明論的に言えば、米国のような文明の「中心」に位置する大国が、文明の「周辺」（ラ米、第三世界、百年前の米国、ロシア）から影響やインスピレーションを受けて変身するという姿は、不思議な構図だ。

が、「弱者」が「強者」に影響するというこの構図の含意は吟味に値する。

今回紹介したストーリーが、米国の迷い、混乱、揺らぎなどを示していることは明らかだ。その嵐の渦は、天才トランプ氏が惹起した部分が大い。が、混乱の収束を図るのは同氏ではないという点だけはたしかだ。

うえのかげふみ

文明論者。一九四八年、東京生まれ。七〇年、東京大学教養学部を卒業、外務省入省。七三年、ケンブリッジ大学経済学部卒業。OECD政府代表部公使、メルボルン総領事、駐グアテマラ大使を経て、二〇〇六―一〇年駐パチカン大使。さらに、杏林大学客員教授、立教大学兼任講師、国際日本文化研究センター共同研究員を歴任。著書に『現代日本文明論 神を呑み込んだカミガミの物語』（第三企画）『パチカンの聖と俗 日本大使の一四〇〇日』（かまくら春秋社）などがある。